寄稿

渋沢栄一が歩いた秋田県（前編）

武　田　　大

（秋田銀行　経営企画部）

はじめに

渋沢栄一の肖像画が描かれた新一万円札がいよいよ２年後に登場する。渋沢は、秋田県との縁が深いことは機会がある毎に紹介してきた。今回の寄稿の中に登場する県内の人物や数々の遺跡等を情報発信することで、令和の顔となる渋沢を身近に感じる機会になれば幸いである。

財務省は、2024年度上期をめどに現行の紙幣のデザインを20年ぶりに一新すると発表した。新一万円札の肖像画には、第一国立銀行（現在のみずほ銀行）や東京証券取引所、東京商工会議所などの設立に関わり「日本の資本主義の父」と呼ばれた渋沢栄一が描かれ、裏面には東京駅の図柄が配置される。渋沢が、昨年の大河ドラマ「晴天を衝け」の主人公として登場していたことは記憶に新しい。しかし、渋沢と秋田県との関わりや、過去に秋田県を２度訪れて当時の有力者達と面談していたことを知る人は多くない。新一万円札の主である渋沢栄一の知られざる一面を、県内で関わりのある人物や遺跡等を通して紹介してみたい。

第一国立銀行頭取渋沢栄一は、明治15（1882）年５月20日に、宮城・岩手・秋田県など、東北地方に開設された同行各支店の事務巡視のため東京を出発した。この時の巡視の状況は、同年発行の「東京経済雑誌」（国内外の経済問題を中心に、政治・社会問題について論説）の中の「陸羽（東北地方）近況」で知ることができる。

「渋沢栄一 銅像」
（東京都千代田区常盤橋公園）

一節を紹介すると、「久保田は人口稠密（込み合っている状態）にして少しく繁盛の姿あり。然れども船棹の便に遠く、物貨輻輳の地たるを以て之を商業市街と云うべからず」と、初めて訪れた秋田市の印象を述べている。

渋沢は、初めて秋田県を訪れて、どこに行って誰と会い、何を語ったのか。２度目に来県した大正６（1917）年10月、県内各地で開催された講演会や、当事の新聞および「渋沢栄一伝記資料」（全68巻）で確認することができる。具体的な人物をあげると、菅礼治、那波三郎右衛門、川村永之助、船木久治の他に、荒川鉱山経営者の瀬川安五郎、東北屈指の大地主である池田甚之助、辻兵吉および本郷吉右衛門など、当時の県内有力者達と面談したことの記録が残されている。訪問の主な目的は、渋沢が東北地域に開設した直後の同行の各支店を訪れ、自らの目で秋

田支店を含む各営業所の経営状態を把握することにあった。同時に各地域の有力者と面談することで情報収集に努めた。

渋沢の事務巡視はほぼ１か月を費やした。当時の交通手段は、海路は汽船、河川は船、峠越えは駕籠か徒歩などが一般的であったから、移動は相当の困難が伴ったと推測する。

ちなみに、奥羽線の全線開通は、渋沢が初めて秋田県を訪れてから23年後の明治38(1905)年であった。

○菅礼治（1841～1912年）

菅礼治は、雄勝秋の宮村(現在の湯沢市)に生まれた。父運吉は既に江戸に出て木材問屋を営み、久保田藩(現在の秋田県)や紀州藩(現在の和歌山県)などの御用商人として巨富を得ていた。菅は幕末から明治維新にかけて活躍し、その蓄積した富を御用金として提供するなど、藩侯の絶大な信用を得て、那波家、山中家と並んで名字帯刀を許された数少ない町人であった。

明治４(1871)年に東京から引き揚げて来ると、秋田県初の銀行である第四十八国立銀行（現在の秋田銀行)の創立に際しては、その中心となって奔走した。そして、町人出身ながら推されて取締役支配人の役職に就いた。

また、同行２代目頭取に就任した明治13(1880)年には、商人達の結束を図るべく秋田商法会議所(現在の秋田商工会議所の前身)の創設とともに、衆望を担って会頭に推挙された。

渋沢の知遇は、大蔵省の官僚時代もしくは第四十八国立銀行の設置手続き中に得たものと推測する。その後の秋田県の為替方の事務引継ぎ等銀行間のやり取りが、第四十八国立銀行と第一国立銀行両銀行間で行われたことを考えれば、二人の信頼関係は既に築かれていたことになる。

旧雄物川の河口近く、セリオンタワーが聳(そび)え立つ場所の近くに雄物岸街区公園がある。公園内の石碑「明治天皇行在遺跡」は、かつて菅の自宅があった場所だ。菅は、商法会議所会頭就任の翌年、明治天皇行在所をわざわざ自費で新築したのだという。翌年、渋沢が土崎に立ち寄った際は、宿泊等で菅に世話になったと回顧している。菅の自宅は、後の土崎大火(明治31年)で焼失してしまったが、当時を偲ぶ遺跡となっている。

「菅礼治 肖像画」
（菅太工門氏所蔵）

菅は、第四十八国立銀行頭取を明治32(1899)年４月まで務め、明治45(1912)年３月27日東京で死去。享年72歳であった。(注)

(注) ちなみに、礼治の長男礼之助(1883～1971)は、第二次世界大戦後の同和鉱業(現在のＤＯＷＡホールディングス)会長および石炭庁長官を務める傍ら、裸馬(「らま」もしくは「らば」)を俳号とした文化人でもあった。

菅家三代(運吉・礼治・礼之助)の墓所は、湯沢市秋の宮地区にある。ドライブがてら国道398号線を栗駒山寄りに進むと、やがて秋田杉で山間を囲まれた嶽の下地区に至る。そして、右の脇道に入った田んぼの中に目指す親子三代の墓石が並んで立っている。

３人の功績を思えば、静かで慎ましやかな風景がそこにある。大正13(1924)年に礼之助が詠んだ句、「雪に埋もれてならべる墓や父と母」の句碑は、旧中山小学校跡地に見ることができる。

○川村永之介（1841～1909年）

川村永之介は、明治10（1877）年、郷里秋田の川尻村（現在の秋田市川尻）で養蚕組合川尻組を組織し、蚕種紙の製造と輸出に取り組んだ。秋田県内における海外貿易の先駆者と伝えられている。同14（1881）年、イタリアのトリノに販売出張所を設立した。輸出量は、一時全国の４割を占めるまでに成長して、当時の日本の外貨獲得に寄与したものの、蚕の微粒子病の蔓延で４年後に道半ばで撤退した。

渋沢と面談したのは、最初に来県した明治15（1882）年のことであった。渋沢の生家が養蚕を営んでいたこともあり、川村と２人で養蚕の話題で盛り上がったそうだ。

渋沢が養蚕の話をすると、川村は「東京で銀行などをやっている人が、なぜ養蚕のことを知っているのか」と、不審がった。渋沢は、「元来、自分は百姓だから」と言って、お互いに養蚕のことを語り合ったのだという。

渋沢との共通点は養蚕にある。渋沢の出身地、武蔵国榛沢郡血洗島（現在の埼玉県深谷市）の生家では、当時、麦や養蚕の他に染物の原料となる藍玉の製造・販売をしていた。生家は現在、深谷市が保存・管理して内部を見学することが出来る。二階部分は広く明治の頃は蚕室に使用されていたと、観光ガイドの説明を聞いた。

車で秋田市の川尻総社通りから、新屋方面に向かう途中、秋田刑務所の手前の細い道路をさらに左方面奥へ進むと、やがて住宅や社宅等が立ち並ぶ場所に至る。この一角に、川村達が運営する川尻組の拠点があった。そして、明治天皇が明治14（1881）年９月17日に立ち寄られたことを示す石碑（明治天皇駐輦址）が建っている。

この石碑を背に、南側に目を向けると視界が開け、眼下には旭川の流れが見える。明治の頃、この地は蚕を育てる目的で開墾され、一面は桑畑となっていたそうだ。この地で商品化された蚕種紙は、船で土崎港を経由し、さらに横浜から海外に輸出されたという。

「明治天皇駐輦址石碑」
（養蚕組合川尻組があった場所）

○瀬川安五郎（1835～1911年）

瀬川安五郎は、天保６（1835）年、盛岡市肴町で両替屋を営む４代目惣助の長男として誕生した。明治５（1872）年、江戸時代からの豪商小野組に入店し秋田支店長として赴任、米や生糸と雑貨類を取り扱った。明治７（1874）年11月の小野組の破綻により独立した。明治９（1876）年２月、秋田県仙北郡荒川村（現在の大仙市協和）の荒川鉱山が民間に払い下げられたのを機に鉱山経営に乗り出し、新しい鉱脈を発見して徐々に鉱山経営を安定させていった。その後、明治26（1893）年には全国の鉱山中第５位の産出量を稼ぎ出すまでに発展したが、明治29（1896）年２月、三菱側と瀬川で荒川鉱山の売買契約が締結された。以後、鉱山は三菱の経営下に置かれた。結局、個人で経営するよりも資本力のある三菱に本格的に運営してもらうことを選択し、瀬川個人による鉱山経営に終止符を打った。

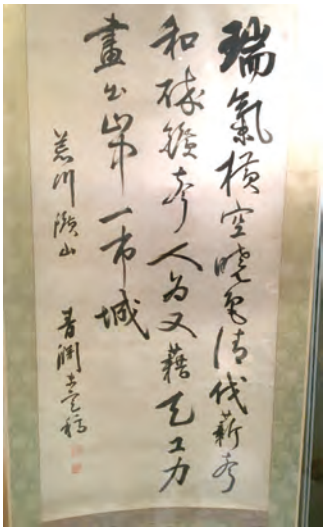
「現在の荒川鉱山跡」

瀬川は鉱山経営の傍ら、秋田県初の銀行である第四十八国立銀行の創業に関わった。そして、取締役に就任（瀬川徳助名義）するなど、当時の秋田県内における経済力・影響力には大きいものがあった。

当時、瀬川の自宅は大町三丁目にあった。現在、株式会社秋田県農協電算センターの建物があり、敷地内に「明治天皇行在所跡」の石碑が建っている。

明治天皇は、明治14（1881）年の行幸の際、瀬川邸に二泊した。瀬川邸を評して、当時の新聞に次の内容の記事が掲載されている。「当家は著名なる豪商なれば、観美麗を極めたるは言うまでもなく、先ず、御玄関の正面には７尺（およそ２m）四方の衝立に銀金具にて左右へ環を打ちつけ、紫の総（ふさ）を下げたり」とある。また、「二階の玉座からは、数百の鯉を泳がせた池を高覧できる」とあり、当時の瀬川邸の状況を詳しく報じている。

渋沢は、翌年、天皇行在所になったこの瀬川邸に宿泊したあと、瀬川が経営する荒川鉱山に出向き、直接経営状況の説明を受けた。この時の鉱山の様子について自筆の七言絶句を残した。この七言絶句は、大仙市が運営する資料館「大盛館」に展示されている。



「渋沢栄一が荒川鉱山を詠んだ七言絶句」
（大仙市大盛館（民俗資料展示館）所蔵）

内容は次の通り

瑞気横空暁雲清（ずい気空に横たわり暁雲清し）

伐薪声和砕鉱声（伐薪の声は砕鉱の声と和し）

人為又藉天工力（人のためにまた天工の力を藉り）

画出山中一市城（画き出す山中一市城）

荒川鉱山青淵（注）未定稿

（注）「青淵」は渋沢栄一の号

渋沢は生涯のなかで多くの書を嗜んだ。現在残っている書は、自作の漢詩と論語など中国の古典の一部を揮毫（きごう）したものが多い。節目に、旅先で自分の思いを詩作で表現した。

○2代目 辻兵吉（1852～1926年）

辻兵吉は、湯沢の山内三郎兵衛の末男として生まれ幼名を末吉といった。実兄の由松が秋田市の本間家の養子となったと同じく、やがて初代辻兵吉の養子に迎えられ、その娘エイと結婚、初代没後の明治13(1880)年２月、２代目を襲名した。

初代辻兵吉は呉服商・両替商を営み、秋田有数の資産家として知られていたが、後年、辻家が東北屈指の富豪までに成長したのは、２代目の功に帰せられるであろう。

辻は豪放な性格で、他人の意見によく耳を傾ける雅量の持ち主であった。また、商人として機敏かつ緻密・細心な面を併せ持ち、同時に熱心な一向宗の信者でもあった。明治時代の多くの実業人と同じように、辻も儒教をバックボーンとしており、その強烈な倫理観は言行の数々に見られる。例えば、大地主・大富豪に畜妾の習慣も彼には無縁であったし、貴族院における多額納税議員互選資格を有しながら、終始、実兄の本間金之助を立て、自らは固辞し兄の当選に尽くした。このことは秋田銀行頭取に就任した後の銀行経営にも反映し、功績抜群幹部行員を空荷の荷為替で多額の焦げ付きを発生させた理由で断固解雇したり、支配人といえども、不行跡の訓戒は個人的言行にまで及んだという。一方、辻育英財団を創設し、経済的に恵まれない多くの俊才を世に送るなど高い見識がうかがえる。

辻頭取時代の銀行役員は、県内有数の大地主と商人で構成されていた。辻は筆頭株主の地位にあって、東北屈指の富豪の財をバックにオーナー頭取として君臨した。

当時、しばしば地方銀行破綻の原因となっていた情実貸出、投機的貸出、政争への関与など、辻の場合には全くあり得なかった。

前述の実兄の本間金之助は、明治２(1869)年、25歳で秋田・本間家の養子となったが、明治40(1907)年、第四十八銀行第３代頭取に就任し、弟辻兵吉の主宰する秋田銀行と拮抗するに至るが、２人は終生良きライバルであった。

明治34(1901)年10月27日、秋田銀行初代頭取池田甚之助が在任期間５年余で死亡したため、代わって副頭取辻兵吉が２代頭取に就任した。辻頭取はその後20年余にわたって秋田銀行を主宰し、幾度かの恐慌に際しても微動だにしない銀行までに育て上げたのである。(「秋田銀行百年史」参考)

渋沢との面談の際、辻が放資(投資)に苦しむと訴えたことがあったという。このことで、後年の秋田銀行設立の出資につながった可能性が高い。辻頭取は、設立の経緯から親銀行ともいえる第一国立銀行(後の第一銀行)の渋沢頭取の自宅へ他役員同伴で時々訪問していた。この辻との交流は、「渋沢栄一伝記資料」等に記録されている。

「2代目　辻　兵吉」

＜以下、来月号に続く＞